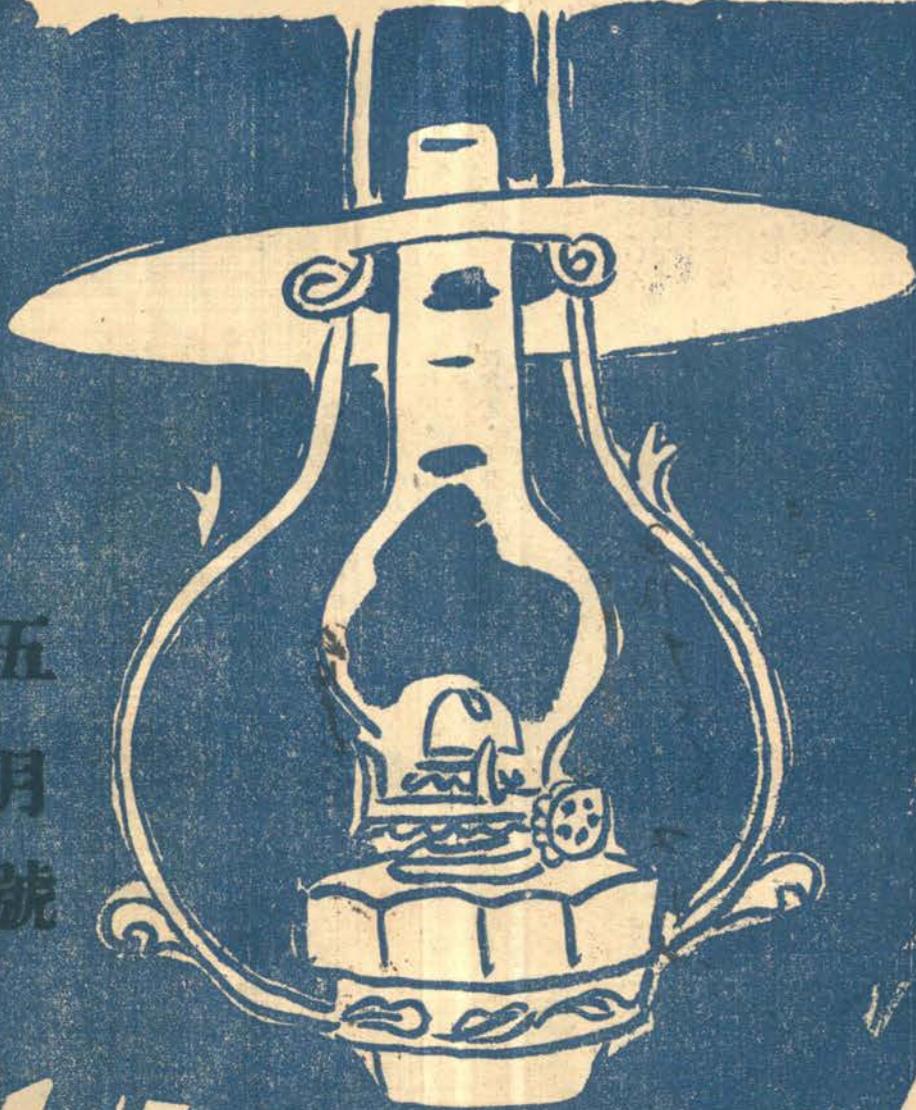


麻生路郎★主宰

創刊大正十三年・通卷二百五十四號

昭和廿二年七月一日
昭和廿三年五月一日發行
第五卷 第四號
五月一號發行



五月號

Pensoj flugas trans la land - limon

No. 254



川柳 圓卓

座談會

久しぶりに座談會をやらうではないかと四月十日の夕、藤村雅光氏邸へ集つた。庭先の櫻が春雨に煙ぶつて情趣が深い。昨年十月復員された澤田博士も、「伴郎ボケをしてれ」と云ひながら顔を見せられた。話題は女性を詠んだ句から世の女性に及んだ。

路 郎・女性に關して談す
ことにしたいと思ひます
が……。

鮎 美・現代の女性ですか。
路 郎・え、最近の句にあ
らはれたものから始めて、
肩の凝らぬところへ持つて
ゆくことにしたいですね。
幽 王・今日は婦人の日です
ね。

豆 秋・え、そうです。
四郎作・何か、婦人が選舉
權を獲得した記念日とか
で……。

路 郎・それだと云ふ譯では
ないのですが、ぶツ突つた
のです。
路 郎・没食子君の句に
男みたよな女が生理
休暇とや
と云ふのがありますがこの
句から始めましょうか。た
まには句評が主でなくて、
これで現代の女性を解剖し
たり世相を語つたりするの
も面白いと思ひます。
豆 秋・そうですな。

路 郎・今の世相と關聯して
この句から「女と生理休
暇」と云ふことについて話
してもらつたら……。一つ
豆秋君からどうですか。

(豆秋氏に對して)
あんたどこの會社は生理休
暇があるのですか。
豆 秋・うちの會社はないん
です。労働基準法違反です
が恥かしかるとか……。

鮎 美・私の方の會社ではあ
ります。
豆 秋・生理休暇は恥かしか
るので本人が申し出ない場
合は出さないでもいゝんで
せう。
鮎 美・ところが生理休暇が
出来た當初は恥かしかつて
どらなかつたのですけど、今
ではどうちようして……ぞ
うちちようど云ふ言葉はいけ
ないかも知れませんが、
そうどしか思へないことが
あるんですよ。うちの會社
では生理休暇は三日間とる

ことになつてゐますが、三
日間の休暇を取つたことを
忘れてしまつて、十日程経
つて又休暇を取つたりする
んです。これなどは全く悪
用ですね。
四郎作・進化したら二度ある
んかな。アハ、ハ、ハ、
鮎 美・結局悪用ですな。寶
塚で生理休暇の女同志がバ
ツタリあつて(笑聲)るんで
すからな。

路 郎・没食子君に、
生理休暇映畫へ今日は
行くつもり
と云ふ句があつたな。
四郎作・生理休暇と云ふのは
最近出来たものですか。
没食子・大分前ですな。
豆 秋・實施は去年の九月か
らです。
鮎 美・この頃では取らなく
ては損やと云ふので十六・
七才位で堂々と取つてます
よ。
豆 秋・もう恥かしかると云
ふ心配はないんですな。恥
かしからすのは人道しいけ
ないから……。

路 郎・女で恥かしかると云
ふ氣持が残つてゐるのはど
んな點でせうネ。もう殆ん
ど残つてゐないのではない
かな。演壇へ上るのも恥か
しがらんし……。
四郎作・借金も平氣……。
(笑聲)

路 郎・女が恥かしからぬの
はい、とせうか、悪い
事でせうかね。本人にとつ
て、或ひは社會としていゝ

事か悪い事か考へさせられ
ますね。
豆 秋・男としては恥かしか
つてくれる方が……。
鮎 美・恥かしかる方が日本
女性として魅力があります
ね。外國の女性でも恥かし
がつてゐるのでせうが、國
情が違ふので、映畫なんか
見ても、そう云ふ方面の感
じをうけませんか。
路 郎・勿論外人でも、顔を
赤くすることはあります
よ。しかし、近ごろの日本
の女は堂々とあぐらをか
くし……。

四郎作・酒は飲むし、煙草は
喫ふし……。
路 郎・葎乃の疎開してゐる
ところの村の文化會の
女の醫者で煙草は喫ふし、
酒は飲むし、あぐらはかく
し、男以上で、男の方がへ
こたれてしまふさうです
よ。まことにサツパリした
人だと聞いているので一度會
つて見ようと思つてゐま
す。今後は男の方に恥かし
がると云ふ特殊性が生まれ
て日本では逆に入れ替るか
も知れませんか。(笑聲)

鮎 美・この間ラヂオで男女
共學に就て話してました
が女の人が共學を堂々と主
張して男の方が受太刀でし
た。昔は男裝した人が、服
裝を男にして強がつてゐま
した。現代女性は女の服
裝をして、現代女性に女の服
飲むし煙草も喫ふし……。
四郎作・兎に角男性女性の外

男女両性に作用する
プレホルモン
塩野義製薬 皮下注射・錠劑

に中性と云ふのが出来まし
たね。
路 郎・昔は、お婆さんに多
く、中性を見かけたもので
すがね。
豆 秋・私の家の近所にオカ
マ(女裝の男性)が出て、
オカマが恥かしかる技巧を
満點にしてゐます。これは
技巧丈ですがなかなかうま
いですな。
鮎 美・男裝の女性が、ズツ
と以前に句會へ来たことが
ありましたな。
路 郎・幽蘭女史のことです
ね。
鮎 美・今どうしてます。
路 郎・ソ聯へでも行つて
るかも知れない。でもしたく
の意味のえらい女でしかた
。アレで俠骨もあつて半島人
で學校に行けないと云つて

困つてゐるのを自分の籍へ入れてやつたりしてゐましたよ。しかし、どこまでがどうなのか判らないがね。美・あんな人がヒョッコリ此處へ現れて來たら恥かしがるかな。

路 郎・恥かしがらんね。美・どう云ふわけだせうね。

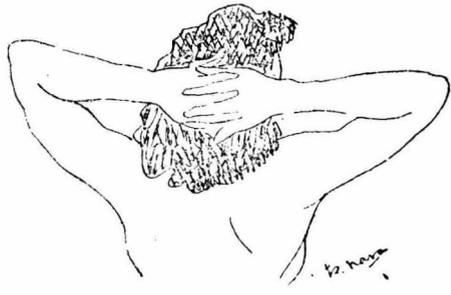
路 郎・今の女とは全然違ふからな。美・どんな點が違ひますか。

路 郎・今、君が云つた様にパーマメントをかけたたり、口紅をつけたりするの違つて、男の着るものだつたらなんでも着る。はかまもつけるし、法被も着て歩く、丸刈りにもなる。そのくせ岡山で身賣をしてね。豆 秋・ほう、身賣りを……。路 郎・身賣りしたと思つたらすぐに、娼妓仲間へ廢娼運動をするんですな。公會堂を借りて、演説會をやる。業者の方では慌て、娼妓をやめさすから結局身賣りの金をふみにじつた事になる。

四郎作・そんな女を買ひにくる人がいるかな。路 郎・店へ出るまでに運動をやつたらしいです。なか／＼の美人だつたのです。寄席へ出たり妾をしたり、色々なものをやつてゐる海千山千なのです。だからはづかしがるやうなことは全然ない。留置場を半分宿屋

にしてゐたからね。美・性の缺陷はなかつたのですか。路 郎・性的缺陷はなかつたらしいね。(こゝで栗氏出席) 豆 秋・今、女がえげつものやられたが……女の作家としてゐる句は淑やかさを失つてをりませうね。路 郎・そうですね。豆 秋・男が戦時中に戦鬪帽をかぶつた様に、戦時中の女もやつぱりモンペをはいて

がありますが、これなんかは荒んでゐませんね。路 郎・(没食子に)君とこにも女流作家がゐますな。没食子・え、二人をりまです。葉菜子さんと良子さんです。一人は方正調でちよつと強い句を作りますが最近上手になられた。豆 秋・鮎美さんこのさよこさか、何んとか云ふ人……。美・さよめさんです。豆 秋・此間句會に出て來て



出席者 (順不同・敬稱略) 本社主幹 麻生路郎 不朽會指導 藤村雅光 不朽會重役 澤田四郎 醫學博士 水谷鮎美 不朽會會員 市場没食子 官吏 須崎豆秋 同社員 西尾栞 同社員 木下幽王 同社員 麻生P O E 本社編輯部

はつたが若いのになか／＼いゝ句を作る。鮎美さんの指導で……。美・いや、そんなこと。豆 秋・若い作家になられませう、若い作家になられませう。美・ええ、若いと云つても……十八ですね。いゝ作家がちよ／＼をりま

が男の人より婚期が早いので長続きしません。豆 秋・いゝ作家になると思ふとポツンと消えてなくなつてしまふ。その點夫婦とも作家は長続きしますね。美奈子さんみたくに。路 郎・幽王君はこの中で一番若いからしやべつてくれたまへ。昔の人の眼で今の若い人を見る事は殺生だと思ふ。何んとか云つても時代の影響を受けるからね。今時そとわで歩いて直ぐにお轉婆と云ふ事は出來ないのと同じだね……。

美・休臭と云ふものはたしかに魅力を感じますよ。實際私なども感じますね。通勤の時電車が満員で、若い女の人は降りられなくなるためか、戸口へかたまつて入らないのです。それで身動きも出來なくなつて手も上げられない。(身振でそこへ女の人の頭がこの邊(口より一寸はなれたところ)へくると油のにはひがブーンとして魅力を感じますね。

路 郎・若し人は女の肉體から發散する休臭に魅力を感じるのも、その一つじやないかな。 (路 郎、速記に餘念なし) 路 郎・若し人は女の肉體から發散する休臭に魅力を感じるのも、その一つじやないかな。

路 郎・實際満員で押されてゐるうちにキツスする様な形になつてゐることがありますな。休臭も若い人たちの魅力でせうが、唄もその一つでせうね。唄の魅力と云ふことは尤も昔もそうですがね。これは人間に限らず他の動物でも同じですが雄が雌を呼ぶ時に發する音なのですから……。

路 郎・歌て短歌ですか。栗 路 郎・いや歌謡曲だ、それに映画とかレビユーによる足とか腰の持つ線の魅力ヅカの影響で今の若い人たちは線による魅力も相當に感じてゐるのだと思ふね。栗 路 郎・昔にも線の魅力がありましたね。四郎作・そうですね。路 郎・昔から着類に折目を

どうすればよいか或る夜の壁へさく 夕帆
 春眠へ妻の進めてゐた時計新居濱市黙紅
 まき割に退けられて子の物足らず 同
 パーマネントかけたる妻に儼然たる 同
 つきつめた心ほぐれる子のおなら 同
 途方もない儲けのところで起される 鳥根縣米 市
 スタイルに夕陽をはちく若きなり 同
 夢多き微笑を秘めた濡れまつげ 同
 書類の中から答へる村役場 同
 長袖をふりむいてゆくミスボリス愛媛縣曉 明
 獨立をした子へ母のまだ貢ぎ 同
 長靴と下駄と別れた水溜り 同
 皆までは父に告げないお母さん 同
 女教官熱情の炎をチトそらし宇部市栗 美
 言葉少なに佛壇の埃り拭く 同
 そう言へば青酸加里に近づく人々 同
 さくら傳染病院の窓開いてゐる 同
 五本目の煙草に見えて来た故郷 滋賀縣養 饒
 それとなく母はタンスの値を眺め 同
 闇油四十九日を細う駆け 同
 吸殻を拾ふ男に誰がした金澤市冬思夫 夫
 耐乏の生活の中へお客様 同
 洋服を賣らうか賣るまいかは淋し 同
 喰ひ延ばすだけの台所なりき音唐津市邦 夫
 保険勧誘員で中隊長がたづねて来 同
 ラジオしきりに政局を告げ雪模様 同
 男性よ舌を大事にしなはれや大阪市ひさみ 同
 公園の寒き逢曳ちぢこまり 同
 どの寮も疎開やもめのすすぎもの 同
 ビツケルを磨く日向に猫も居る兵庫縣花 子
 處女と言ふ若さへ山を戀ふる春 同
 産み月の腹で提げてる市場籠 同

子を抱いてあれも二十歳を出ぬ二號山梨縣唾 子
 焼け落ちたもとの都に立つ夜霧 同
 二千圓こんな子供が儲けて来 同
 病みぬいて娑婆を離れた顔であり愛媛縣椋 人
 盆の艶しげに春宵の友として 同
 嗜好等いわず女へ酒煙草 同
 夜の汽車断りもなく膝借られ岡山縣七面山 同
 膝を貸し背中を借りて睡る汽車 同
 縮緬じやこ之に目があり口があり 同
 あの世とやらを想ふ夕焼け大阪市葉 光
 丸木橋吊り橋渡るヤミの炭 同
 精神修養をさせる風邪引き 同
 道問へば此の裏どすと教へられ大阪府春 月
 意見したものの昔を思ひだし 同
 握つてるシヨールのかげで手ぎざり 同
 吊し柿のれんの如く青葉店松江市風 子
 引揚者冷たくひえた街を行く 同
 尖端をゆくダンサーに春を知る大阪市千 舟
 一番に來て座布団を運ばされ 同
 口喧嘩女とことん負けぬ聲豊中市柳 堂
 婦人部の長だ娘のペン走る 同
 配給へ今日から妻としてならば大阪市花鶴美 美
 ベン今日も夫の趣味へ使われる 同
 民衆化と言ふに職長さん強し大阪市静 花
 人だかりのぞけば指環賣つてはる 同
 小使に似た月給に印が要り名古屋鳳 石
 失業に女だつたらごも思ひ 同
 米を待ち月給を待ち春を待ち奈良縣美 朝
 吏道刷新そんな言葉もおましたな 同
 受検料高くて一校だけにする京都市巷 歩
 空株を社長がやつてゐるそうな 同
 こんな世は寝てゐると見舞に來貝塚市一 郎
 泥んこになつて女は生きて行き 同

せうな。
 没食子君の句に、
 蒸溜水の様な女にこび
 られる
 と云ふのがあります。
 鮎美・すつと前の句ですか
 没食子・一、二月頃の句でせ
 う。
 路郎・それも今の女と云ふ
 ものを見てる句ですな。
 男うなつき女しやべつ
 てゆく戎橋
 これもなんでもない様な句
 だが今の男、今の女を、よ
 く見てゐると思ふ。雅光さ
 んも女に對して何か……。
 雅光・いやー私は……。
 豆秋・この句は町の風景な
 んですけど……。近ごろは
 家庭でも男が女に頭あがら
 ん。

けといつた調子でね。
 没食子・ちよいと千切つて
 呉れるのでは目立たないの
 でね。一度にまどまればさ
 あと云うてほり出せるの
 に……。
 雅光・月給が少ないので、
 女が不満だが、そのわりに
 女は働きますせん。私は方
 面委員をしてゐます。私が尋
 ねて來る人が子供があつて
 働けないと云ふんですよ。
 それで何才位の子供かつて
 聞くと、三つか、四つでせ
 う。それなら寝るのが早い
 です。それから寝させてから夜な
 べに仕事が出来ると言は
 ね。に仕事が出来ると言は
 けなすんですな。
 四郎作・今に亭主と女房と別
 々に飯を分けて食べる様に
 なるかも知れませんね。ソ
 聯が現にそうなんです。お前
 はなぜ辨當を食ひに歸らな
 いのだと聞きまして、配給
 の分をもう食つてしまつた
 のでと云つて二日位は水だ
 け飲んでゐるのです。女房は
 どううかと訊くと、あれはし
 まつやだから、食べるのが
 あるんだとすましたもので
 す。
 路郎・變態としては日本に
 もありましたよ、古本大學
 と云ふ店をやつてゐた××
 君は住ひは少し離れたところ
 の路地の奥だつたが三人
 兄妹が各自別々に會計を持
 つてゐて八百屋へ行く時で
 も、これからお使ひに行く
 んだけど一緒に持つて來た
 げよか。うん、何々買つて

老いてから趣味に生きたる繪を習ひ 石川縣光 郎
 職業を問はれて闇屋どもつてる 同
 遅参簿へ冷たく捺した腫の動き 松江市弧呂二
 結論は税金額へもつて行き 同
 憧れの土を踏んだがまる裸愛媛縣鶴 聲
 久潤は我がどん底に涙ぐみ 同
 枝振りをはめて日延の茶をにこし 愛媛縣孤 村
 豊年の穂に穂へ知事のしわが延び 同
 皆乗つて僕だけ残る正直さ 吳 市 甦 光
 フラツシユへ男一生肩の幅 同
 労働者又々政府をぐらつかせ 島根縣邇 坊
 エーそ空のダンスも賣つちまへ 同
 笑ふ癖それさへ神經質な人 松江市康 男
 たそがれに變らぬ暮らしが淋しい 同
 春がすみ脳病院へつゞく路 同
 落ぶれてからの友情をしかと抱き 同
 持たぬ者持つ者はつきり花の下 岡山縣北 路

値の高きことだけ土産旅の町 北路
 派手に着て派手に踊つて嫁かす 兵庫縣萬龜子
 戀人の眉の細さに気がとがめ 大阪府鬼 八
 あめ玉を貰ひ子供の様な禮 鳥取市木 魚
 復員の靴雪どけの日を稼ぎ 長野縣汗 青
 強盗のヒウマニズムを語り行き 八代市ト 占
 位牌屋のお世辭陰氣な聲になり 津山市市 穂
 採手する癖あちまぐ溜めている 別府市清 明
 空想の一步すゝめばまあい、ほ 福岡縣月 太郎
 二號には二號の理窟生活苦 岸和田みのる
 そでの下出さねばかせむき強くなり 布施市醉 月
 先生の還曆を祝ひて
 還曆と見えぬ若さが薪を割り 大阪府柳 太郎
 親に似て酒もいけます踊ります 大阪市のぶを
 知らないと答へられない地位に 大阪府三 郎
 ただ歩む夫の肩の頼もしく 大阪府神 峯
 インフレが心の友を減らしたり 大阪府斜 水

百酒洞栗の號

西尾 栗

規定があれば、案外仕様のよいものであるが、自由であるとなるとき、却つて難かしいものである。その例が名前である。出来た子供の名前は親の權利と自由であるが故に一つ素晴らしいものをと、ひねくり廻してつけると、之では代議士に出る時には、皆が書きにくがつて要がありまへんと言はれて、折角の漢和辭典も、おつぼり出して、結局平凡な名前をつけることになる。

ところがこゝに一つ自分でつけられる名前に雅號といふものがある。之は自分の趣味で勝手につけられるものだけに、素晴らしいものを考へて、一枚の紙に十も十五も書き列べて、決めても、結局半年も経てば改號したい氣持となるのは僕許りではないらしい。自分で自分の雅號をようつけずに先生にお願ひしたり、友達に見てもらつたり、親と相談したりして、又候本名と規を一にすることになるのも面白い現象である。昭和六年に川柳を初め、簡單な好む性分かつけたのが現在の雅號であるが、半年程で嫌になつてゐた。ところ

が雑誌に出る僕の號を家内が見て、同じくに見えて、折角のあんなの句が前の人の句と一緒の様で、えらい損だつせといふので、先生に相談すると、改號はしない方がいゝだらうと一本釘をさされた。だから今なほ百酒洞栗である。栗といふ號の由來は川柳の一句一句が僕の生活の栗であるといふのであり、百酒洞といふのは、百は一百で酒は水編に酉となつて僕の一百水性の酉といふことなるのである。

そも／＼を訊けば雅號も面白し

来て」と云ふと、すぐに「お金」と云つた調子なんですね。
 四郎作・貧乏神を祭つてましたね。
 (二、三人思ひ出した聲)

雅 光・現にありませう。僕の店に、別々にやつてるのが。妻君の方はなかくしつかりして、古着なんかで儲けて亭主より上手なんです。

栗 ● そんなんは愛情はどう云ふ風なんぞせうね。
 雅 光・そんなくはしい事は知りませんかね。
 四郎作・矢張り、金錢の對照になるんだらうな。

栗 ● するとその方法は……
 路 郎・要求した方が借方でまけだな(笑聲)
 栗 ● そんな例はありますよ。貯蓄兼エロチックなのが……大分昔の話ですがね。亭主の方が「今晚オヤマ買ひやろか」と云ふと奥さんが早速風呂へ行こんですな。そしてオメカシして塗つて、主人の方は丹前なんかに着込んで、朱の煙管なんか出してね。奥さんに喫つけさしたり……

豆 秋・ほう、えらい氣分を出しよんな。
 鮎 美・それから一晩愉快に夕食したりして過すんです。そして電燈を消すんです。あくる朝になると昨夜使つた書代・煙草代・肴代全部を書き出すんです。そのお金は奥さんがもらつてしまはず、貯金するん

です。
 栗 ● 金が澤山なかつたらあかんな。

鮎 美・え、金が澤山入つた時にオヤマ買ひをするんだそうです。
 豆 秋・居續けは出來んのやな。

鮎 美・あくる日、會社から歸つて來たらもう差し向ひですよ。
 栗 ● 相當に年を取つてるんでせうね。
 鮎 美・え、そうです。三十

栗 ● 若い間にはそんな眞似は出來ませぬね。私が結婚した當時、一圓ずつ入れてゐたんですがね、月給が四・五拾圓の頃でしたからたまりませぬね。最後に小使が不足して來る(笑聲)今晚は貸しといてくれと言はんならん様になつてくるんですね。

路 郎・もう、それぐらいにしようぢやないか。一本つけて呉れんと聞いたられんよアトは筆記をヌキにして、ゆつくりお話し願うことにせう。御苦勞でした。
 (幽王・P.O.E筆記)





浅間の煙 (二)

沖野岩三郎

望遠鏡

アメリカのサンノゼハミルトン山にあるゼムスリツチの天文台を見に行った日本人が、天文台の近くまで来た時、大きな聲で「しまった、僕は望遠鏡を忘れて来た。折角天文台へ登つても望遠鏡がなくつちや星が見えない。」と叫んだ。この天文台には直径四十二尺の世界一大きい望遠鏡が備へつけてあるのである。

世界の二大事件

私はよく言ふ。「千八百七十六年に於ける世界の二大出来事は、日本に沖野岩三郎の生れたこととアメリカのアレキサンダー・グラハム・ベルの手で電話といふものを發明したことである。」グラハム・ベル博士が自分の研究室から助手のトウマス・ワトソンの研究室にはじめて電話が通じたのは、その年の三月十日であつた。その時ワトソンが受話器を耳にあてて、グラハム・ベルの「ミスター・ワトソン、カム、ヒアア、アイ、ウオント、ユウ。」といふ言葉を聞き聞いたのであつた。この話を新聞で讀んだ當時のハアバード大學留學生伊澤修二、栗野慎一郎、金子堅太郎の三人が、グラハム・ベルを訪ねて、「その機械で日

本語が話せますか。」ときいたのでグラハム・ベルは笑ひながら、「無論聞える。」と言つて三人にその實驗を許した。千九百二十二年のゼ・ナショナル・ジヨグラヒック・マガジンに、ブレヒストリック・テレホンデユを題して、「電話で最初に話された外國語は日本語である。Japanese was the first foreign language spoken by telephone」と書いてある。電話で話した最初の外國語が日本語であつたといふことは、日本人の誰もが知つてゐてよいことではなからうか。しかもその通話をした日本人が、電話器で日本語が話せるかと聞いたといふ話は、傳説ながら面白い話ではないかこの記事を讀んだ讀者諸君の誰かが、これを放送局の話の泉に投書してもそれは駄目である。何となれば私がこれを五問題にして提出したが、放送局では無情にもこれを握りつぶしてしまつたからである。

専門外の専門家

昭和二十二年十二月十一日夜の放送局の智慧袋係は、デンマアクの樅の木のことについての説明中、この筆者は内村鑑三といふ宗教家であつて、科學者ではないからこんな記事はあてにならない、と言はんばかりの口調で説明してゐた。ところが何ぞ知らん

内村氏は日本の農學士であり、米國の理學士であつて、純粹の科學者である。宗教に至つては神學校で一日も勉強しない素人なのである。その素人業があまりに秀でてゐたので、却つて本職の科學が影薄く見えたのであらう。

アメリカの三途の川

米國加州のリビングストン市に渡邊宗太郎といふ牧師が居り、隣のタアロック市には渡邊連太郎といふ牧師がゐた。この兩氏の間には三途の川があつたならば、一方ではワタソウ、一方ではワタレンと叫び合つたであらう。

お釋迦様の薬袋

サンフランシスコの博物館東洋部に、大きな釋迦涅槃の掛物があつた。私はその前に立つて子供の頃村の寺院で見たこの涅槃像を、微笑しながら眺めてゐると、一人の青年が近づいて来てその説明を私に求めた。で、私は廻らぬ舌で必死に説明したが、天の邪鬼の説明にはほとと困り入つた。やつとそれを合點させたと思ふと今度は、高い木の上に袋のぶら下つてゐるのは何であるかと聞かれた。私は釋迦といふ

セイントが死ぬのを惜しんだ天の神様が、名薬を袋に入れて投げ下してくれたが、不幸にもあの通り木の枝にひつつかつて、地上にとどかなかつたため、釋迦はどうさうあの薬を飲まないで死んだのである。と言ふ私の説明を皆まで聞かず、その青年は、「あそこにモンキイがゐるではないか。」と捨ぜりふをして次の室に去つてしまつた。日本で何十回か涅槃像を見たが、未だ會つて一度も猿と薬袋の關係を考へたことはなかつた。なるほどどうなづきながら私も青年の後に於いて次の室に移つた。

清談・商談・お待合せに
喫みどり

みどりでの商談
運が向いて来る
上六交又點西北角

頭脳覚醒に
(本定製薬品・プロバミン錠)
ゼドリン 錠
★睡気を防止に
★頭を明快に

名文句

ある若き牧師は説教中に、「牛も眠る草木の頃。」と言つた。それを聞いた一老人

マウント・ハミルトンの天文台を見た日本人の一行が、自動車で山を下つてゐる時、ここからサリナスまで何哩かと聞いた男があつたので、運転手が、「まあ百哩ぐらゐら。」と答へた。するとその男は、「スピードを出せば何哩になるか。」と聞いたが經驗深き運転手君も、そんな測定法は知らないといふえ、ただ目をばちくり。



續川柳講座 (14)

麻生路郎

暗合と類句に就て

(一) 暗合

句會で、披講の際に、一つの句に對して二人の句主が表はれることがあります。その時には句主の一人に句箋を見せ、筆蹟によつて眞の句主を決めることにしてゐます。不幸にして選者の手に残らなかつた方の句主の句は没となり、同じ句でありながら、一方が抜けて、一方が落ちると云ふのは、いかにも片手落ちな感じがいたしますが、こんな場合に没になつた方の句主はアツサリ引下るのを常といたして居ります。よく調べて見ますと一字や二字違つてゐることもあり、一字違つても、充分没になるだけの優劣のつく句もあるのでありますから、句主が二人表はれたからと云つても、あながち選者の手落ちとばかりも云へないのであります。一字も違はない句に句主が二人以上表はれることは句會の場合に限りません。新聞柳壇の選句や雜誌

應募句の選などをして居りますと度々ぶつつかる問題であります。そうした同様の句を指して、暗合句と呼んで居りますが、一般の新聞や雜誌の場合には暗合でなくて、他人の句を剽竊して投句して來る場合もあります。しかし永年選をしてゐると暗合と剽竊との區別はたやすく見分けることが出来るものであります。古本屋が、自分の本を賣りに來たのか、萬引した本を賣りに來たのか、すぐ見分けがつくのと一寸似て居ります。専門の柳誌になりますと、剽竊句などはありませんが、時に暗合することはあります。暗合は雜詠にくらべると題詠の方に多いやうであります。多いと云つても、無關矢鱈に暗合するものではありません。

大正六年四月一日の句會で「人」と云ふ題詠に三人の句主があらはれたやうであります。どんな句かと申しますと

太陽は無駄に光れり無人島
と云ふのであります。大した句ではありませんが、想像力が生んだ句が期せずして合致

した譯です。句主は郁男、三太郎、紅太郎の三人で劍花坊派の錚々たる連中でありました。

又、
眞スグにあるけば人に突き當り

と云ふ句は十千樺、劍珍坊の二人の句主が表はれて居ります。一つの句會で、こんなにも暗合することは珍らしいことでもあります。これは「人」と云ふ題が出れば斯う云ふ句をと云ふ碁や將棋の定石のやうなもの、いつとはなしに句主の頭に出來てゐるからであります。それが証據には、それ等の句主が何れも當時の猛者連であることでもあります。あまりに安易に句を作るから斯うした結果をまねいたのであります。しかし、原因はそればかりではありません。川柳それ自體が、僅に十七音字の短詩型であること、句主の頭のレベルが、近似してゐると云ふことが大きな原因なのであります。川柳の十七音字中心に當分動きがないものとするれば、句主は思想の隔絶によつて、表現技術の妙味によつてそうした暗合から回避するより外に手はないのであります。

こしらへて後から食へて片附けて (積算子)

伊賀・伊勢方面へは のりば 上 六
河内・大和方面へは のりば アベノ橋

近畿日本鐵道

こしらへてあとからたべてかたづけ (竹莊)

その人の品性を疑はれ、痛くない腹を探られるからであります。何れにしても自分の句が暗合した場合には作句した實際の時は別として後日に發表した句主は潔く、自己の句帖から抹殺することあります。他に對しては適當な方法で取消しておくことあります。

(二) 類句

暗合と云ふのは内容も形式も全く同一のものとなつた場合のことですが、類句と云ふのは、内容の類似、形式の類似、内容形式共に類似した場合の謂ひでありますから形式が非常に近似してゐても、内容が全く別箇のものを表はしてゐて、二句とも生かして差支がない場合もあるのであります。その意味から選者によつては類句として取扱ひ、二句の中の少しでも佳吟だと思ふ方を一句生かす場合と二句とも捨て、しまふ場合があり

ますが、選者によつては類句として取扱はないで佳吟だと思へば二句とも生かす場合もあるのであります。従つて、そんな句に接した時には選者は余程慎重な態度でそれ等の句に接しなければ、類句でないものを類句とし、類句を類句でないものとする誤りを犯すことになるのであります。

句會での作品のやうに、同時に作られたものを選む場合や、投句のやうに同時に作られたものでなくとも、同時に選をする場合の類句の發見は、それほど困難ではありません。しかし、それ等の作品と時を隔てて作られた作品とが類句であるかないかを發見することはなか／＼に難事であります。選者として古句は云ふまでもなく、近い過去の作品をある程度眼を通してゐなければならぬからであります。殊に川柳に限らず、短歌や、俳句のやうな他の短詩型に對しても、有名な作品は一應眼を通してゐないと飛んだ失敗をするのであります。

作家としては類句を惧れてゐるては全く手も足も出ない譯でありますから、類句と知らずに、かなり多くの類句を作るものであります。そして、それらの類句をいかにさばいて行くかが、選者に與へられた仕事の一つなのであります。選者としては、それらの

類句中から、佳吟一句だけを残す場合もあらうし、類句全部を捨て、しまふ場合もあるのであります。類句と知つても、一句でも採る場合は、その作家が全く初心者であり、これを育て、行かなければならぬ場合に限られます。初心者が多く集つてゐる句會で、レベルを落して選句をすれば、その多くの作品は過去の

権現堂の櫻と吉原

(はがき選集)

中野 三 允

「今や堤上數里櫻花ノ絢爛年ト共ニ加ハリ關東隨一ノ稱アルニ至リシモ過去ヲ追憶セバ轉タ今昔ノ感ニ堪ヘザルナリ」と、昭和八年四月に権現堂(埼玉縣幸手在)に建てた「順禮殉難碑」(由來略す)にある。私は此の櫻の花の時を見たことがないので、今年こそはと他に語ると、それが薪に伐られて一本もなくなつたといふので驚いて、

作品の類句であることはまぬがれ難いのであります。しかしいつまでも、そうした選をしてゐれば作家はそれでいいのだと思つて、駄作を繰返し、類句を繰返へして、遂には救ふことの出来ない結果を招くことになりまますから選者としての責任の苦澁を嘗めなければならぬのであります。

では、どんな句が類句であるかを例示することにいたしませう。

こうなされませと死人の掌を合せ (荷十)

いとこへ参りなさいと手を組ませ (湧三)

用ひた語彙はかなり違つてゐますが、ねらひどころは殆んど同じだと云はねばなりません。しかし、この程度の句を

態々其跡を見に行くに成る程一本もなかつた。

散步文學。古川柳(二ノ三)の「竹亭日記」(山路閉古)に「十一月二十八日」に「午後吉原に赴き、菜樓主と會合、吉原情緒保存、遊女品位向上のことなど、語る。云々……私は廢娼實施で、吉原はなくなつてしまつたことのみ思て居たが、此日記で見ると依然として存してあるのに眼を睜つた。久良伎が生きていたなら、私は此の方面の時勢に遅れては居なかつたのにと亡き友を憶ふの念轉た切である

— 武藏市・俳人 —

發見した時に、一々これを取消してゐては煩鎖に堪えぬものがあります。そこは世の中はうまく出来てゐるもので、幾ら類句が詠出されても、その中で佳吟しか人の頭には残らぬのであります。人口に膾炙してゐる句でも、幾十幾百の類句が生れては死に生れては死んで、その句が只

一句だけ生き残つたのであるかも知れないのであります。そうでないとは誰が保証することが出来るでせう。

花、花、花、人生の表 (七ツ丸)

死、死、死、世界は無い (劍花坊)

この種の類型的な表現も一種の類句だと云へば云へないこともないのであります。しかも格言類句の句であつて本來の川柳から遠く離れた句であります。しかし斯うした類句が生れる点から考えてもマンネリズムから遁れやうとして新しいマンネリズムに陥つてゐた劍花坊派の當時の句風が想像出来るでせう。

「花、花、花」の句と、「死、死、死」の句の二句を比較して見るのに、同一の文字は一字もないが、しかも類型的な句として兩立させることを躊躇したのであります。次の白粉の下は光陰矢の如し

(史城)

風呂嫌ひげに光陰は矢の如し (紋太)

の二句に至つては、同じく類句であり、一句中の半ば以上が同意義、同語彙でありながら、句の内容を検討すると、前者は白粉を通じて人生の無常迅速を詠ひ、後者は單に市井人の生活を詠つて、それ／＼の異つたものを描出してゐるので確然と兩立させ

ることが出来ると思ふものであります。

句會の句にしても、柳誌への投句にしても、出句數の約九十パーセントは没と見ることが出来るのであります。その没の中で技巧の拙劣さや内容の陳腐さ等々で捨てられる句よりも類句としてキャンセルされる句の方が遙に高率を示す場合もあるのであります。類句おそるべしと云ひたいのであります。

要するに、作家の行くべき道は絶えず類句を踏み越えて、作家独自の世界へ進出するのでなければ一家をなすのに甚だ遠いと云はなければならぬでせう。

血圧降下
アーグレン
山之内製薬
血中アウトホルモンとアミン



大阪市 武部香林

愛國譜(五句)

敗戦四年まだ組長の用があり
きちがいになるほど税金掛つて来
まじないをするど巡査は通り過ぎ
魚屋は魔法のやうに鯛を出し
もがもがと代議士さんよ何處へゆく

ガンジー翁暗殺さる

ヒンズー教平和の鐘を引き下し

供出完了

かりそめに水呑などと云ふ勿れ
にこくと芝居の足は纏れそう
無人なり盃に雨を聞きながら
寝りをしてからスルメ引裂かれ
微酔よしペンにインクを濡らすほど
人格者佛の脊に似て圓ろし
ソフト帽提げて貴女はお妾か
素足になつて見給え春が来てゐるよ
嬉しきは松の滴の日曜日
春や春しきりに花粉こぼるゝよ
普天氏の還曆を祝ふ

兵庫縣 戸倉普天

おとなしそなたをねらつて割り込んで
見下ろせば交叉點の往き來面白し

通勤のいつか闇屋と馴染み出し
櫻見に折目のついた牛コート

奈良縣 西垣錦風

飼猫の孕むが妾妬ましく
桃割へ振向く顔に春の風
云ひ捨てた父の言葉が淋しくて
二階借派手な匂ひをたゞよわせ
お家にもあると勝氣な隣りの子

床ばなれ

あしたから働くための猪口をうけ
女學生一人唄へば皆唄ふ
手をつなぎ子供の世界にふれて見る
喰べるだけ喰べて飛び出す男の子
まゝごとの父ちやん買出し行かされる
唯一人母を味方に生きてゐる

旭川市 宮田不二

貯らないくらし髭などたくわえる
角隠し啞かと思ふ程だまり
殺人へ多少は僕も亂歩めき
山が當つて鉛筆削るなり
結氷のガラス都會の地圖に似る
早立ちの樹水へオーバ着せかける
入場式まける氣配はつゆ見えず
山部釣り熊が出そうでよく釣れる
山彦の消えた彼方へ母を戀ひ
出雲市 尼緑之助
小ぼうずのねぞうに四月が来てるなり
バスガールはみ出て春の風をきり
城崎温泉にて
橋と柳各々影をもつて春

孝養の足らぬまんに一周忌

養母の一周忌



窓と私

麻生路郎

私は今後。この窓口で、諸君といろんなことを
卒直に談合つて行きたい。

先づ選のことからはじめよう。

私は毎日、ごつかの句、誰かの句を選してゐる
が、選句と云ふことは決して樂ではない。私の選
句は朝の郵便物からはじめられる。私の主宰して
ゐる本誌の「川柳塔」の句、「近作柳樽」の句な
どはその日、その日の分を片づけることにしてゐ
る。ウンと溜まると、二日も三日もそれに没頭し
なければならぬからである。そうなるを選を片
づけると云ふ意識が働いて、一つの仕事になつて
面白くない。毎日来ただけづゝ、見てゐると、作
家の性格も作句態度などもよくわかるし、その作
家の個性をのびして行く上に、良心的な選が出来
る。作家ののびやうとしてゐる方向を抑へたり、
見逃がしたりすることは怖ろしいことであると思
つてゐる。しかし、いゝ傾向へゲン／＼展びてく
れる作家の句をみまもつて行くことは楽しいこと
である。何か酬ひられたやうな氣がする。それと
反對に、十年一日組の句は私をイラ／＼させる。
どんな選をすれば、この作家の句に生命をふき込
むことが出来るのであらうかに苦慮する。私の云
ふ十年一日組の作家の句は、探れば、殆んど皆探
れるが、捨てれば皆捨てればならぬ。技巧は出来
てゐるが、思想の成長がない。選する者が苦慮す
るのはそこにある。

郷土作家として名をなした高橋かほるは私が、
その昔大阪日日新聞の柳壇を担当してゐるころの



鳥取市 中島 鐵洲
 頭張の利かぬを妻にねぎらはれ
 人疑つてけふも暮れたり
 貿易の失敗談を隠居持ち
 大阪府 西尾 葉

世渡りの術を喋つた後の淋しさ

いつたい何さんやと言はれる化粧で來

唇の赤さが嘘と言ふてます

さうでつしやないかと女房逆ふ氣

ペレー帽如何ですといふかむりやう

溜息を尼僧かくさぬ桃の縁

人が悪いワ養子さんだつかいな

終電車電車まかせの顔でのり

大阪市 竹内 潮花

日曜の雨を机の艶と居る

酒は良し櫻の蕾はかたくとも

シベリヤの人を待つて、歳をとり

セツとして春の響を待つてゐる

驚が來て呉れそうな家に住み

幹事たる誇りカンテキあふがされ

大阪市 木下 幽王

あの人のどら聲それが喜しいの

巡查の若さについて本心を

帝大出先づ書された請求書

ガツガツと云ふ語は俺のためにある

吊皮にサイラの様な客ばかり

袂からおもむろに出す吸くさし

桃色の遊戯へ産婦科そびえ立ち

金つんでそろ／＼家相氣にしかけ

金子ながしを贈つて救済したつもり

あいつには僕も一票いれたのに

大阪市 新井 博也
 麥のびてきた／＼母へありがたし
 ひばりなく真下に街のこえかつぎ
 旅といふ昔のことばなつかしい
 家出した娘歸つて家靜か
 表札もかへずおやじの一周忌
 みにくさを自覺してゐてまだやつし

堺市 吉田 圭井堂

改札に干支を聞かれてどなりつけ

塗り替えた看板元の文字が讀め

蘆田内閣へ

無遠慮に皮肉を飛ばす靴みがき

上品に闇のお話お茶の會

あれ位なら描ける繪を習い

叱つたあとのこぼれ粉煙草

大阪市 池澤 樂居

王仁三郎は死んだガンジーは殺された

上の好むところ下も役徳と稱し

ヤミ退治できると法律思つて居

労働組合上に不の字が似合そう

ぶちあけの電車お米に主がなし

清水市 富士野 鞍馬

つれづれに弾く歌澤はねむくなり

月を見て昔の人と同じ戀

珍らしくこの工場か汽笛鳴る

大阪府 橋本 緑雨

ゼネストのピラきられるところにはり

年寄の仲間にされて腹を立て

聞きいれてくれる父親ふけている

生きがいがあつた人だと御佛前

闇太りかど久振り話し合い

一投句家であつたが、投句家としては異色のある一人だつた。それは句が巧いと云ふ意味ではない。ハガキ一枚に一句しか書いて來なかつたし、しかもそのハガキには必ずその句にふまはしい畫が描いてあつたので一寸變り種の投句家だと思つたのである。そして抜けるとか抜けなるとか云ふことよりも、その句を作り、その句にふまはしい挿畫を描くこと、それ自體を楽しんでゐるやうであつた。それがいつのほごにか、私の主宰してゐる雜誌に籍を置くやうになつた。そして彼が郷土作家としての素質を多分に持つてゐることを知つたのでそれをのびしてやらうと思つて、自然にその方向へ歩み寄つて行くやうに選をした。

彼は私の選句に對して多少の不滿を持つてゐたかも知れないが、私はそんなことには頓着しなかつた。彼の行くべき途は私が一番よく知つてゐると思つてゐたからである。私はごちらかと云へば選句は嚴選の方であるが、彼の入選率は常に二割強を下らなかつた。時には四割、五割強の比率を示してゐた彼がいかに優秀作家であるかと云ふことはこの高度の入選率でも知ることが出來やう。しかし、斯うした高度の入選率も彼にとつては決して偶然ではなかつたのである。彼の句は作ると云ふよりも、彼の生活環境から一句づつたんれんに産み出したものである。そしていつしか郷土作家としての彼をきづき上げたのである。一家をなしてからも彼は常に還境から來る精神的な苦惱によつて思索的な發展を見せてゐた。そこに彼の晩年の輕味の句が産れたのに外ならない。彼は寡作家ではあつたが、二十五、六年間作句し續けた彼の作品はおびただしい數にのぼつてゐる。しかも、その殆んどが私の選になるものである。要するに選句と云ふことは、選者の好きな方向へ引きすつて行くことではなくてその作家の個性を思ふ存分にのびしてやる保母の賢明さと親切さがありさへすればいいのだと思つてゐる。



柳界寒唇録(三)

東野 大八

句評の批評

川柳が發展しない重要な理由の一つに句評がないということが擧げられる。句評と柳界とのつながりがまたほかの批評分野と大いに異つてゐることがまづ考へられる。思うに川柳界というところは、逢へば十年一日の如しとの柳人間の交流が盛んである。長所にまづ批評の短所が發生してゐる。こゝに濃厚な川柳の趣味性がある。川柳を輕文學とし短詩型文學と唱へ人生詩と自負する藝術的な環境を身につけてゐながらその作句鑑賞に對してそれなりのきびしき、批評態度が見當らないのはどうしたことか。この喰いちがいが川柳界において氣づかれていないことはかなしい事實である。句をほめてはかたし易く句をけなすことはむづかしい、それは知己友人先輩に鞭うつ結果となり、冷たい風をわが身に招くものになるからだ。趣味でやる川柳で他人に憎まれてはたのしみがない、これが川柳人にとりつてゐる案外な小心ぶりである。成程さう申せばその人の氣持は判る、判るがしお互いに川柳を廣い世間に正しく出すためにはこれでは身もフタもない。句とともに己れを鍛へ、鍛へた姿で柳界を出ぬ限り川柳はいつまでた

つても柳誌内だけの川柳に終るだらう。川柳界に人並で堂々と正しい批判が行はれないのは實にこの人間的な弱點による。加うるに先輩、後輩をこの世界では實に敏感に頭へ置く。句は人柄だといふが出て来た句は作品であり個人の人格とは別なものである。政治の行い方を憎んでも個人の片山哲は別だ。その分明的な處し方を考へれば先輩であらうとお師匠であらうと、喰いさがつて納得の行くまでしやぶりつくさねばならぬ。清記選などというバカな選句はこの間の事情を如實に物語つてゐる雜物である。

人間である以上、自分の句をほめられることは氣持がいい、悪くいわれれば腹が立つ。それを心得てゐる選者がいふ句ばかりほめてゐることは、八方美人でいふ顔をしよつとしてゐることにほかならない。こんな風で評判がいふ批評家などは批評家ではない。氣に入つた句をほめたのだから、氣に入らない句は何故にビンと來ないか、むじろ批評家はその方に正面切るべきがその資格である。幾百幾千となく柳誌に現れ流れる句のいのちは一休どこへ落ちついてゐるか。蛭子省二氏は拔けた句よりの没の句に私は大いに關心を持つてゐる、と私に語つたことがあるがまさにこれは正しい言ひ方だと思ふ。川柳界に句を作らない批評家や柳論家をもつとつと作り出し、引き入れなければ嘘だ。句と雜文と柳人往來だけを百年一日の如く續けていたのでは退屈で、乾燥した味はただに終る。議論してつかみ合ひなぐり合う様な柳人がドタバタやらぬ限り柳界はよ

地獄變

山根 白星

川柳コント
んで流れつボウフラが湧くもとななる。私は今の柳界にもつともつとカミソリの如き憎まれつ子がぞん／＼出てよよいのではないかと思いつてゐる。

芥川龍之介の小説に『地獄變』といふのがある。良秀といふ給師が自分の一人娘を櫻柳毛の車に乗せて火焔で焼きその斷末魔を繪に

没個性とマンネリズム

石原 青龍

久良俊の川柳定義(?)に「川柳は没個性の詩」と言つた。古川柳に關する限りこれはうなづける。だが現代川柳はそれによいのか。近頃各柳誌の句を見ると、作者名はよくなマンネリズムの句があまりにも多い。あえて個性とまで言わなくて寸句といえども各人の「創作」として、作者の存在を示すものでありたいと念ずる。

— 東京都。川柳評論家 —

したといふのである。ダーウインは、進化論に於て理論的に人間と動物の差異を否認し、今時世界大戦は行動に於て、人間と動物の區別を撤廢した。或る説に依れば、人間と動物の差異は、火を點す事

と、煙をふかすこととの以外にはないからだから、煙草を喫はぬ紳士淑女諸君は羨けのよい動物と言つたら下手な笑話にでもならないだらうか?

先に述べた良秀は煙草を喫つたかどうかは知らぬが人畜獸心の人間に近い動物である。さて現に今様良秀とも言ふべきものに、白星と稱する川柳家が居る。彼に見目よい年頃の實妹があつたが、何時の日からか、えたいの知れぬ熱病にかゝつて生れもつかぬ跛になつたのである。彼はシヨツクを受けずに進ひなかつた。その証據に深いメラネコリーに陥つてゐた。だが或日ふと

眞似られて跛の妹の泣く日なり

の一句を得た時、今迄の陰鬱な表情は綺麗に消へて、快心の微笑さへもらしてゐたのである。もとより駄句ではあつたけれど、今後そのスタツクから作句し得る名句を夢想しての微笑だつたのであらう。彼は妹が跛になつたのを感謝する氣持にさへなつてゐた。

その様な背徳者の罰としてか、彼自身もつたの知れぬ熱病に呻吟する様になつた。醫者も原因は分からぬが、衰弱が甚しいから駄目だらうと言つた。彼は此の時だと思ひ熱と闘ひながら、あへぎく辭世の句を考へるのであつた。

葉に跡をしるさず露のほろり落ち

行年は久遠の宵春で居れる幸

安産のために

ワダカルシューム錠

二句が浮び上ると、心から満足の微笑を洩らしたのである。幸か、不幸か、彼の病は、一日一日快方に向ひ遂に全快してしまつたのであつた。彼は自分の生存したのを呪ひさへし、齒きしりしながらその句を裂き捨てるのであつた。彼は藝術生活、藝術と人間性などについて、柳界諸先輩の御高見を拜聴したく思つた。そして彼は、嚴正な精神的倫理の公判に立つて、多岐の柳界諸兄の傍聴の下に、判決あれば、痛罵の鞭も心よく受けようし、ヒューマニテイのギロチンにも深く首を差し延べようと思つてゐた。

「川柳雜誌」のバックナンバー御入用の方は社のサビス部へ申込んで下さい。在庫の有無や値段をお知らせいたします。

いのちある句を創れ



投稿清規 用紙は原稿用紙 文字を正確に開催月日及場所記入 締切は毎月廿五日 投稿先本社

本社ごどもの日 記念川柳會

四月四日 午後一時 於 一 運 寺

親としてごどもを思はないものはある... 路郎師がごどもの詩心について語られた。

出席者 路郎・潮花・春日・正則・文蝶... 草々・白柳子・鮎美・没食子・翠光

兼題「子澤山」 麻生路郎選

四男五女まだ生きますと産婆言ひ... 子澤山みんな米喰う恐しさ

子澤山ごつちでもいける柄きより... 入學の出来た父兄は語り合ひ

兼題「繩飛び」 清水白柳子選... 母ちやんをよんで繩とび一つとべ

兼題「賃加工」 西尾 栗選... パンの型だんぐやせる賃加工

阪田膽寫版 株式會社 大阪北區芝田町二五番 電話 福島一三九番



六號室

▼しきりに好評の聲を聴く。お世辭にしてもうれしむ。惜しみなくほめられると編輯も調子づく。▼本號は趣向を變えて「川柳園卓座談會」をやり、肩の張らぬ讀物を提供することにした。▼「川柳塔」の人達の寄稿の出足がにぶいので二ページにならない。いつものやうに待合はしてゐては發行日がずれてしまふので下段「窓口」の欄を設置して、拙稿「選と私」を載せた。大八氏の「川柳寒唇録」などもこの欄のものだが、「窓口」が後で出来たので、こゝへ入れることが出来なかつた。一部の人達の要望を容れて前號に課題吟の募集を発表したところが、これ又好評である。スペースと睨み合はして今後もあるような企画を発表したいと思つてゐる。協力やべんたつをお願ひしたい。▼協力のこの欄で、ロスト・ウィークエンドのことを一寸書いたが、あまり忙しくて、とうとう見損つた。そのうち、ギツカ場末のムービー・ショーでもやるだらうと思つて夕刊のアドに氣を配つてゐるが、どこでも上映して呉れない。映畫一つでも思ふやうにならないものが、老人のくせに、映畫のことを免や角云つてゐるのかと笑はないでほしい。これでも明治末葉、淺草の富士館で同じ洋畫をアツ續けに六度位づつ見てゐた僕だから、そ

の熱がまだ少々は残つてゐても不思議はないと思ふ。不朽洞會員で今でも熱心にムービー・シネターに通ひつめてゐるのは柳路だらう。柳路と云へば奉天でも大連でも、張家口でも、よく僕を引張つて行つて呉れたものだ。北京では滞在中、毎晩のやうに、二人で映畫館を覗いたものだ。待たせておいたヤンチョーに搖られながらホテルに戻つたあのころが、今は一つの思ひ出となつて僕のまぶた

募 集

課題吟募集

白米(十句) 濱田久米雄選
同 居(十句) 高田抱逸選
(六月五日締切)

毎號募集 (毎月五日締切)
近作柳樹雜吟廿句 麻生路郎選
川柳塔(雜 詠) 麻生路郎選
文章(評論・研究・感想其他)

投稿規定

▼投句は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅號を明記する事。
▼『近作柳樹』は一般作家の雜吟を募る。
▼『川柳塔』への投句は不朽洞會員に限る。

に迫つて来る。▼ミスプリント位不愉快なものはないが、時には洒落れた誤植をやつて呉れることもある。前號の六號室で、タバコのことに觸れた記事の中で、専賣局のモノホリー・ビュローが、モ

ノトリー・ビュローになつてゐるので思はずふき笑した。これはこの方が洒落れてゐると思つた。澤田博士が中學時代の八木(奈良縣)の測候所はチツともあたらぬので、測候所と云はずに、ドッコイシヨと云つたそうだ。そして當らぬことをドッコイシヨと云ふ方言になつたと談されたが、専賣局も今後、モノトリー・ビュローと云ふことにしてはごうだらう。タバコの原價を聞かされたら氣の弱いものは卒倒するかも知れない。ミスプリントで思ひ出したのは次の歌である。「世の中はすむとにこると大違ひはげに毛がなぐはげに毛がある」(路)

動 靜

▼本社五月の旬會は二日(日)午後一時から住吉交又点東一丁の一運寺で開催される▼本社では四月十日午後六時から藤村雅光氏邸で「川柳園卓座談會」を開催した▼川柳雜誌濱寺支部は五月八日午後六時から堺市諏訪ノ森長徳寺に於て開催される▼南海電鐵川柳會は四月十九日午後四時、屋上川柳室で開催され路郎主幹と川村好郎氏出席▼大阪通信病院川柳會は四月廿一日午後二時から三階圖書室で開催▼扶桑金屬川柳會は四月廿二日午後四時から組合事務所で開催▼「私」第一號が三月廿五日に堺市甲斐町三丁目一私發行所から創刊された▼「みちのく」が青森縣黒石町川柳みちのく吟社から三月五日復刊された▼川柳タアレツ第一號が四月一日別府市弓ヶ濱矢坂方から刊行▼山口柳川亭氏(神戸)は三月六日、二七忌に川柳五四句を記した「憶い出の母」

を上梓された▼「晴窓句集」の第三編が愛媛縣温泉郡北吉井村國立愛媛療養所内晴窓川柳會から三月十五日刊行された、前田伍健氏の序文がある▼小林浪人主宰「讀物」の早春號が三月一日に刊行された。川柳人が多く筆を執つてゐる。發行所は青森縣黒石驛通り月刊讀物社▼香傘月ごよみ川柳會(大阪)では四月八日午後一時から堺市福王寺で花まつり募集川柳披露と旬會を開催した▼大阪市交通局川柳會では四月十六日川柳吟行二條城觀覽を舉行了▼すげ笠川柳社(愛知縣)では五月十六日正午から犬山町専念寺に於て可有忌川柳忌川柳會を開催▼中野三九氏(武蔵野市)は四月中旬に淡路へ古稀記念の旅をされるそうである▼田中辰二氏(熊本)は熊本日に熊本川柳大會を開催させたり熊本中央放送局に柳壇を設けさせたりして柳界のため盡瘁されてゐる

る▼三條東洋樹氏(神戸)は上京の序に週末を利用して日光見物兼ね鬼怒川に遊ばれ「野天風呂男氣弱い眼をそらし」の句を寄せられた▼木村孤浪氏が平塚市馬入二九〇九へ移られた▼松盛琴人氏は三月下旬に東京都文京區八重垣町五高速度美術印刷株式會社へ移られた▼竹田蘆穂氏は三月廿五日岡山縣へ公用で出張、湯原温泉水鳥館から「男女同權砂風呂は民主主義」の句信があつた▼今村良之祐氏は京都府船井郡團部町黒田五四へ移轉された。

創期的新治療劑

ネオハツモン

コメット

黒田製藥株式會社

川柳雜誌

B列5號 毎月一回一日發行

一冊 金十五圓 (送料五拾錢)

半ケ年概算 金九三圓

一ケ年概算 金一八六圓

昭和廿三年四月廿五日印刷

昭和廿三年五月一日發行

大阪市住吉區萬代四丁目二五番地

大府市住吉區萬代四丁目二五番地

行印部 麻生 幸二 郎

發行所 川柳雜誌社

無錫日産 大阪七五〇五〇

